

# 伊藤博文書

## 【訓】

大地球中東海の隈、三千余歳帝閤開く。織塵未だ犯さず神靈の地を、自ら称す東瀛の小蓬萊と。上古未だ聞かず開鎖の論、祖宗の宏謨氣宇恢なり。長きを執り短きを補ひ遺法に即ふ、四海仁に帰すること子来に齊し。武門の擅横何ぞ説くに足らん、神皇の偉略何ぞ美なるかな。西欧輓近研智の術、電線火輪もて万里も縮む。文明を誇唱し利功を専らにす、船車到る所詭譎を逞しうす。誰か活眼を放ちて全球を覩ん、安くんぞ識らん玉帛の戈矛に非ざるを。和親侵略兵力を伴ふ、一朝相反すれば恩讐と化す。宇内の大勢已に此くの如し、今上叙明にましまして大猷を定めらる。励精治を図りたまひて寧日無く、三十余年躋らくも休まれず。民を教へ才を育て祖業を紹ぎたまひ、国光漸く正に五洲に耀かんとす。曷ぞ料らん北門に忽ち釁を啓くを、兩翼既に伸ぶ韓滿の地に。陰風慘澹として雲四に翳る、曠日手を空しくせば金甌危からん。宣戦の大詔天より降り、三十万軍水天に浮かぶ。王師海を渡りて已に五月、前鋒嚮ふ所旂旒を翻す。進みて全捷を期すは日を計るに堪えん、元帥選に膺てらる大山侯。鉞を授けられ征を専らにし魏闕を辞す、平生の研讃子房の籌。勝算胸中に成竹有らん、妖氣坐に覺ゆ豁昊の秋。須らく期すべし敵を破り帰り来たるの日、百戦功就り宸憂を除くを。東洋平和此れより始まる、盛名青史に千秋を照らさん。

明治甲辰六月、古風一首賦して以て大山満州軍総司令官を送り、其の行を壮にす。今復た需めに応じ、再び茲に録す。

## 【注釈】

大いなる地球上の東海のすみで、三千年余り続く帝の門戸が開かれた。神霊がいる地はいまだわずかな塵にさえ侵されたことがなく（外国からの侵略を受けたことがなく）、みずから東海の小蓬萊と称している。古くから外国との交易を行うといった議論は聞いたことがないが、歴代君主の計略は偉大で、見識は広かった。（諸外国の）長所をとり入れ、短所を補い、それらは古くからの法律・制度に即している。天下は帝の仁政に服従しており、それは子が親を慕うようである。武門（徳川幕府）の横暴なふるまいはあえて説明する必要もないが、天皇の偉大な計略の何と立派なことであるか。

ヨーロッパは最近知の技術をみがき、電信線や汽車でもって万里（の距離）を縮めている。（自らを）文明であると誇大に主張し、利益や功績をほしいままにしている。船や鉄道はいたるところで怪しい動きを盛んに行っている。誰が物事を見ぬく力を発揮し、全世界を観ているだろうか。どうして玉と綿織物（貿易などの平和的手段）が武器（武力的手段）でないと認識できるだろうか。

世界の大勢はすでにこのような状況であり、今上（明治天皇）はすぐれた英知で大きな計略を定められた。内政を治めることに尽力していたため、やすらかな日はなく、三十年余りもの間休むこともなかった。民衆を教育し、才能ある人物を育て、祖先の開いた事業を継ぎ、国の栄光はようやく、今にも輝こうとしているところだった。

（そうしたなか）にわかに思いがけず、ロシアとの戦端が開かれ、すでにロシアの勢力は朝鮮・満州に及んでいる。北風は薄暗く、雲が四方を覆っている。始終何もせずに手をこまねいていれば、外国の侵略を受ける危険がある。宣戦の大詔が天皇よりくだり、三十万の陸海軍が海に浮かぶ。天皇の軍隊が海を渡ってすでに五月、前鋒が向かうところ、旗がひるがえっている。進撃して全勝を期す望みはもう間もなく達せられることだろう。元帥に選ばれたのは大山巖侯爵。大山侯は天皇より征討の命を受け、遠征に専念するため朝廷をあとにした。常日頃より研鑽をつみ、中国古代・漢の軍師であった張子房のごとく謀に長けている。胸の内では十分な勝算の見通しがある一方で、この大空が広がるときに、悪い予感もなしにあるだろう。ぜひとも敵を破って帰還し、百戦の功績を遂げて天皇の憂慮を取り除いてくれたまえ。東洋の平和はこれより始まる。（貴方の）立派な名声は歴史に長く輝くだろう。

明治三十七年六月、古風一首を作り、大山満州軍総司令官に送り、その旅立ちを盛大にする。今また求めに応じ、ふたたびここに記す。

侯爵 伊藤博文

（訓読は吉田茂記念事業財団編『人間吉田茂』中央公論社、一九九一、栗原健「大磯・吉田茂元総理邸訪問記」付記一による。注釈も上記の書を参照。）